

今金町文化財調査報告書

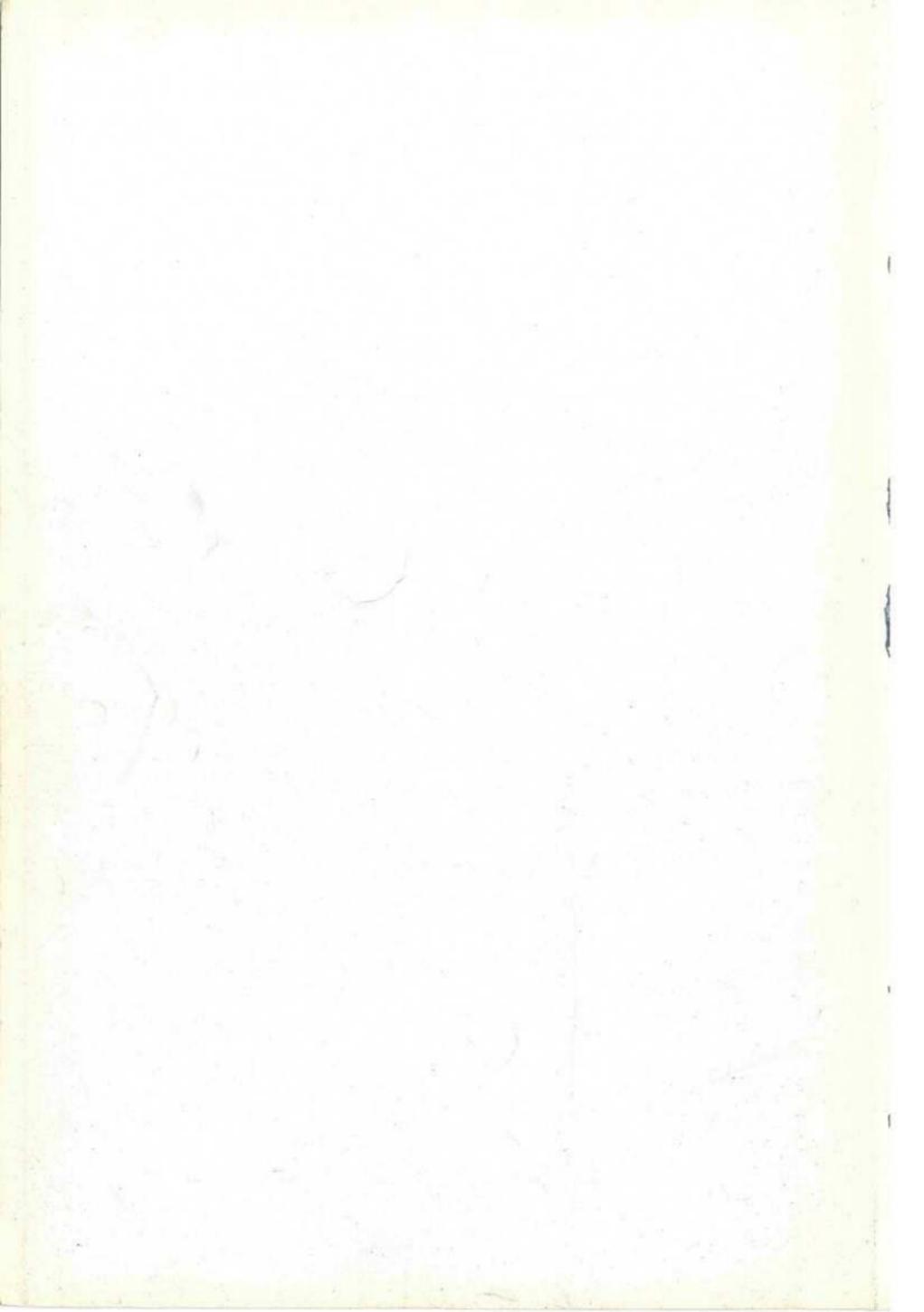
ヒリカ

美利河3砂金採掘跡

一般道道島牧美利河線今全町支度川改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

北海道今金町教育委員会





图版 1 遗跡遺景

序

今金町は、金・銀・銅・マンガン・ゼオライト・めのうなどの鉱産資源に恵まれており、とくに後志利別川上流の美利河地区においては、江戸時代から松前藩および箱館奉行により砂金採掘が行われ、明治以降には、マンガンの採掘が行われました。

砂金採掘跡に関しては、「美利河1・2砂金採掘跡」の調査により、当時の砂金掘りの様子を物語る遺構の状態が詳らかにされ、本町の歴史を知る上で大きな成果が得られました。

このたび、道道島牧美利河線の改良工事に伴い、新たに砂金採掘跡が発見され、記録保存のための事前調査を実施しました。

ここに調査報告書を刊行し、調査成果の記録として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、調査にあたって多くの方々の御指導・御協力がありましたことに深く感謝いたします。

平成3年2月

北海道今金町教育委員会

教育長 遠藤正光

例　　言

- 1 この報告書は、一般道道島牧美利河線今金町茶屋川改良工事に伴って、平成2年度に今金町教育委員会が実施した美利河3砂金採掘跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。
- 2 調査地区は、瀬棚郡今金町字美利河134-4、134-28、134-29に所在する。
- 3 調査は、北海道開発局函館開発建設部の委託により今金町教育委員会が下記の体制・期間で実施した。

1) 調査体制

調査主体者	教育長	遠藤正光
社会教育課長	久保田庄一	
社会教育兼		
文化財保護係長	村上規雄	
学芸員	寺崎康史(発掘担当者)	

2) 調査期間

平成2年9月1日～平成3年2月28日(現地調査9月3日～9月14日)

- 4 本書の作成、編集は寺崎が担当した。
- 5 現地の測量は、シン航空写真株式会社に委託した。
- 6 現地調査および整理作業は、下記の方々が從事した。

〈現地調査〉 宗像公司、中村和正

〈整理作業〉 浜田弘子、牧田寛子

- 7 調査にあたっては下記の機関および人々の指導ならびに協力を得た(順不同、敬称略)。

文化庁 北海道教育委員会 勘北海道埋蔵文化財センター 新潟県佐渡郡真野町教育委員会 今金山

岳会 函館開発建設部美利河ダム事業所

田辺征夫 矢野牧夫 畑 宏明 長沼 孝 藤野次史 金子勘三郎 本間裕亨 若林秀和 野村勝太郎
宗像久子

目 次

序

例 言

I	調査の概要	1
1	調査の経緯	1
2	遺跡の位置と周辺の地形	1
3	調査の概要	3
II	遺跡と遺構	4
1	全体の状況	4
2	水 路	4
3	石 垣	4
4	採取場	5
III	ま と め	12
	主な引用・参考文献	12

挿図目次

図 1	遺跡の位置	2
図 2	調査区と周辺の地形	5
図 3	遺跡断面図	6
図 4	遺跡全体図	7 ~ 8
図 5	石垣平面図	9 ~ 10
図 6	石垣断面および立面図	11

図版目次

図版 1	遺跡遠景
図版 2	写真測量用気球
図版 3	遺 構(1)
図版 4	遺 構(2)
図版 5	遺 構(3)
図版 6	遺 構(4)

I 調査の概要

1 調査の経緯

函館開発建設部では、地域の森林、観光、鉱産資源などの開発道路として、また、不通区間を解消し、近接地域間の産業、文化の振興を図ることを目的として、今金町美利河と島牧村を結ぶ一般道道島牧美利河線の工事を昭和50年より着手した。

当初、工事用地内には埋蔵文化財包蔵地の存在は知られていなかったが、平成元年6月工事関係者により、石垣が発見され、直ちに今金町教育委員会に通報された。今金町教育委員会では、現地を確認し、昭和56年・63年に調査された美利河1・2砂金採掘跡と同様の水路、石垣が残されていることから、砂金採掘跡と判断した。翌月、函館開発建設部より遺跡発見通知書と埋蔵文化財保護の事前協議書が北海道教育委員会あてに提出された。北海道教育委員会では10月所在確認調査を実施し、その後、函館開発建設部と北海道教育委員会、町教委で協議を重ねたが、工事計画の変更による現状保存が困難であることから、平成2年9月より記録保存のための調査を実施することとなった。

2 遺跡の位置と周辺の地形

今金町は北海道南西部の渡島半島の付根のほぼ中央に位置し、東西27.5km、南北35.3km、面積569.88km²、人口約7,900人の農業を主な産業とする町である。

遺跡の所在する美利河地区は、町の北東部に位置し、後志利別川、チュウシベツ川、ビリカベツ川の三本の河川の合流点あたり通称三股に集落が開けている。かつては、マンガン鉱山が操業し、相当の活気があったが、鉱山の廃業とともに人口は減少の一途をたどり、現在の人口は約100人である。

昭和54年より美利河ダム建設が着手され、平成3年2月より試験湛水の開始が予定されている。このダムの完成に伴いレジャー・保養施設などの周辺整備がなされつつある。

利別川、ビリカベツ川、チュウシベツ川の合流点付近には広い平坦面が広がり、これらの平坦面は、標高120~150m級の美利河地区では最も良く発達した河岸段丘である。本遺跡をはじめ、美利河1・2砂金採掘跡はこの段丘上に位置する。

この段丘面には厚い砂礫層が堆積しており、利別川本流やチュウシベツ川の上流地帯には、花崗岩類が分布しており、砂金が産出するのに恵まれた自然的条件が揃っている。

昭和56・63年度に財團法人北海道埋蔵文化財センターによって調査がなされた美利河1・2砂金採掘跡では、遠く上流から水を引いて、礫を取除き砂礫層から砂金を採取した水路、石垣、採取場が遺構として残されている（北海道埋蔵文化財センター 1989）。

同様の採掘跡は、今金町内では利別川上流域の美利河から中流域の種川までみられる。なかでも、美利河、花石地区に大規模な跡が残されている。

また、その他採金に関する遺跡としては、カニカン岳金山跡がある。カニカン岳七合目あたりには横穴、竪穴状の山金を探掘した跡が無数にある。鉱物用の石臼が発見されているが、比較的新しい明治20年代から開始されたとされる（矢野 1988）。カニカン岳における採金は昭和4年頃まで稼業されていたといわれる。

美利河地区には、これら近世以降の遺跡の他に、旧石器時代の遺跡がビリカベツ川左岸の標高150m以上の丘陵上に分布している（図1）。

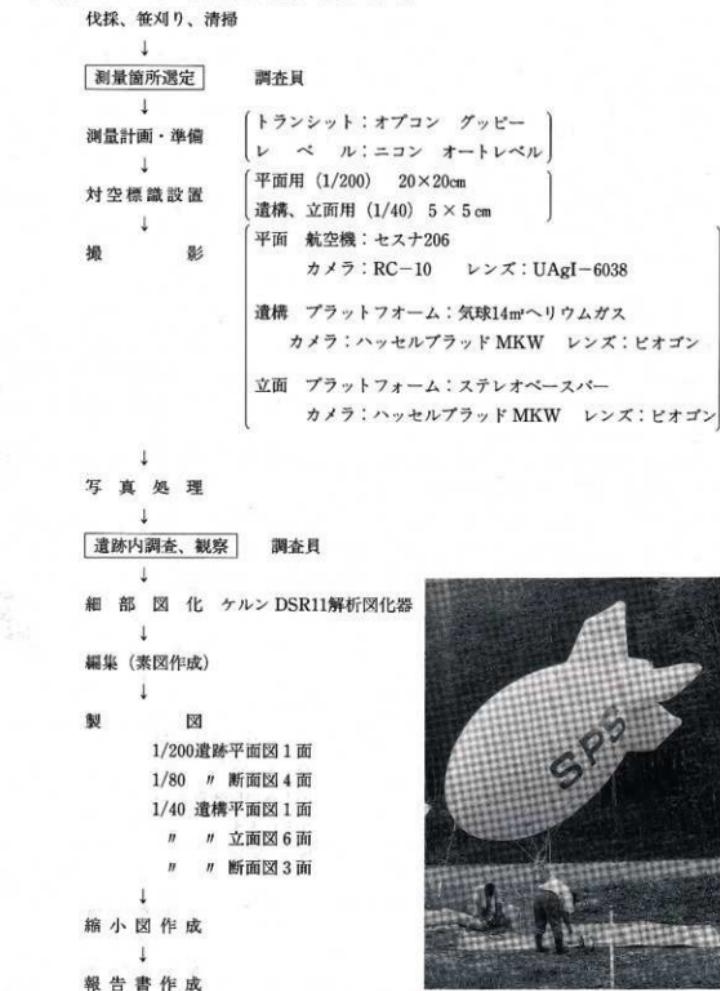


図1. 遺跡の位置

(国土地理院発行2万5千分の1地形図「美利河」を複製)

3 調査の概要

調査は6,580m²の面積を対象としたが、充分な調査期間がとれなかったため、遺跡全体の状態の把握に主眼をおき、測量による調査とした。測量は写真測量の方法を探り、基準点測量から製図までを業者に委託した。作業の流れおよび使用機器は以下の通りである。



図版2 写真測量用気球

II 遺跡と遺構

1 全体の状況

遺跡は利別川右岸、標高136～148mの河岸段丘上に位置し、利別川に沿って南北約900m、東西約60～170mの範囲を有し、遺跡の推定面積は約107,000m²である（図2）。

遺跡南端から250mほどまでの範囲は、営林署による大がかりな採石により破壊されているが、今回の調査区から北側は、水路、石垣などの遺構が無数に並行しており、良好に残存している。

調査対象区域は面積6,580m²で、標高は143～146mである。調査区北東端は急峻な崖となり、利別川に面している。川との比高は約13mである。

調査区南西部側には、所在確認調査の際、礫が散在している箇所があったが、調査を始めた時点にはすでに工事のため排水溝が掘削されたり、重機が入っていたりしたため、遺構は確認できなかった。よって、調査の重点を調査区中央の水路と北東部においていた。

2 水 路

調査区域内に2本の水路を確認した。水路1としたものは、自然地形と思われる段差の肩の部分に長さ約55mにわたり、深さ約20～30cm、幅約30cmの浅いU字状の溝が、調査区ほぼ中央を南北に通っている。水路1は調査区外南東へ延び、約50mで自然の沢と合流する。調査区外北側へはどこまで延びているかは確認できなかった。

水路2は調査区北東端にあり、長さ約36m、幅は上部で約6m、下部で約2m、のV字状を呈しており、利別川に向かってほぼ北東方向に延びている。

水路1と2では、その形態が大きく異なっており、同じ機能を持った水路としては考えにくい。美利河1・2砂金採掘跡では、採取場へ水を導くものと、採取場で砂礫を洗い流した水を流すものの二者に分けられたが、ここでも水路1は前者に、水路2は後者に相当する。水路2については、人力でV字状に掘削したものではなく、水を流した結果削られたものであろう。

3 石 垣

3基の石垣を確認し、石垣3は水路2に伴うものである。

石垣1は東西方向に両側に3～4段の礫を積み上げており、長さ4.5m、最大幅1.6m、深さ0.7mである。

石垣2は石垣1同様両側に3～4段の礫が積まれ、石垣1に並行する。長さ9m、幅1.7m、深さ0.9mをはかり、石垣1とのあいだには、石垣の礫より比較的小さい礫が散在している。

石垣3は石垣2に連結するように北東方向に延びている。一部両側に礫が積まれているが、水路2に沿って片側に積まれている。長さ13m、高さ2m、両側に礫が積まれている部分の幅は2mである。石垣3および水路2の両側には拡大あるいはそれ以下の大きさの礫が広範囲に分布している。

4 採 取 場

調査区北東部には4か所のコの字状に削られた凹地がみられ、地山の礫層まで採削した採取場と考えられる。

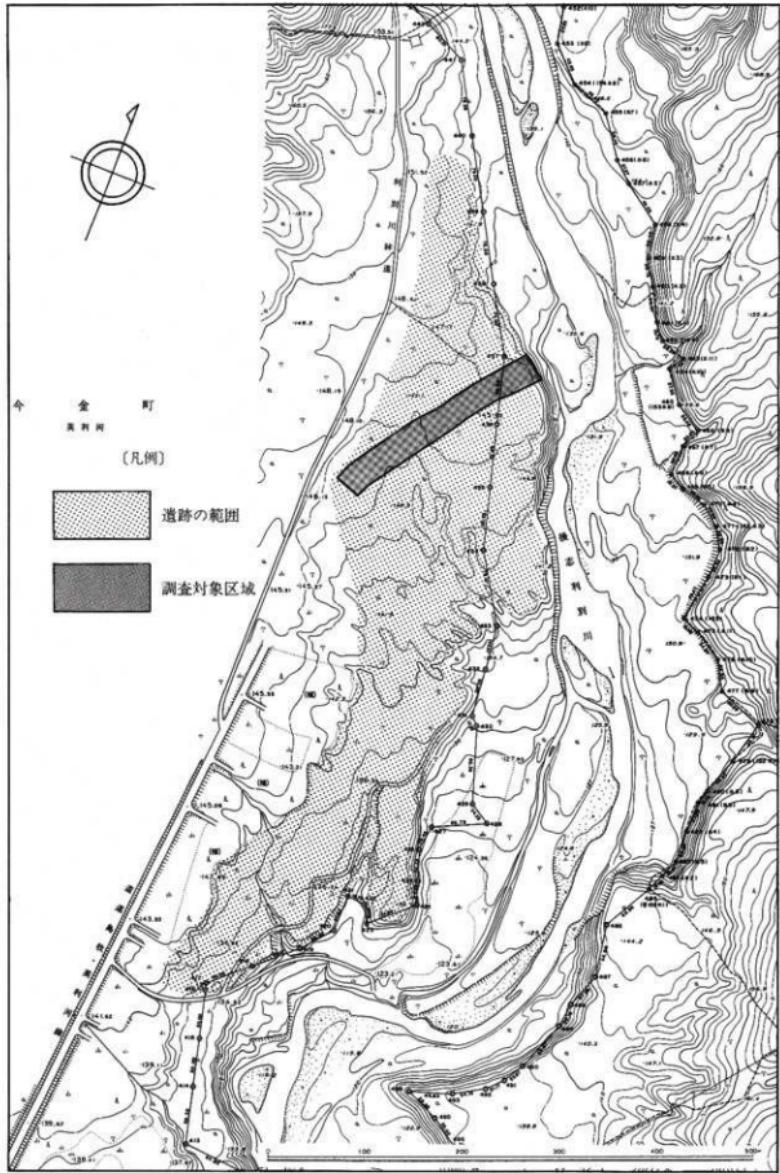


図2 調査区と周辺の地形

採取場 1 については自然地形かどうか判別が困難であるが、2 ~ 4 については明らかに掘削した跡である。とくに採取場 3 は 5×7 m の長方形を呈し、深さ 2.3m を測る。掘削跡の縦断面は緩やかな斜面を呈する（図 3 D-D'）。

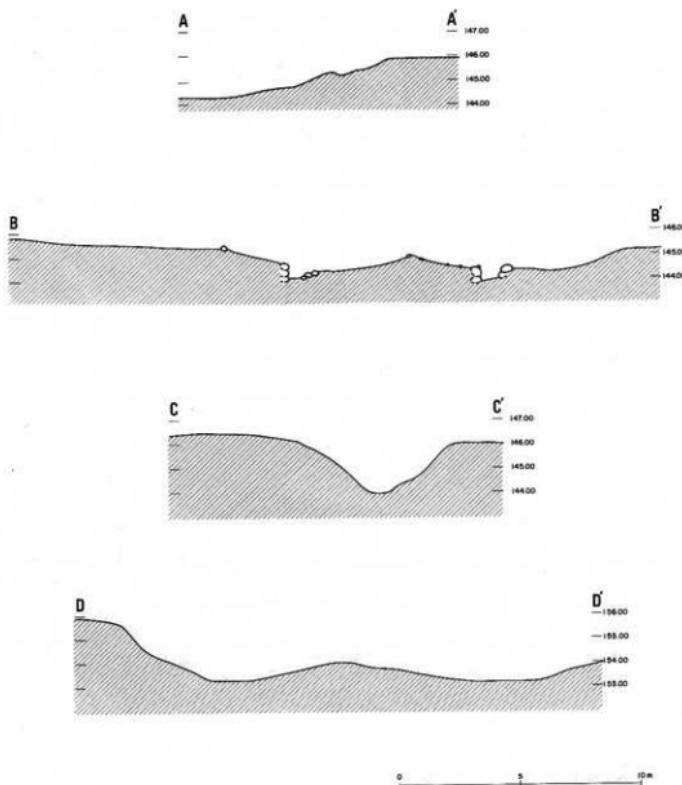
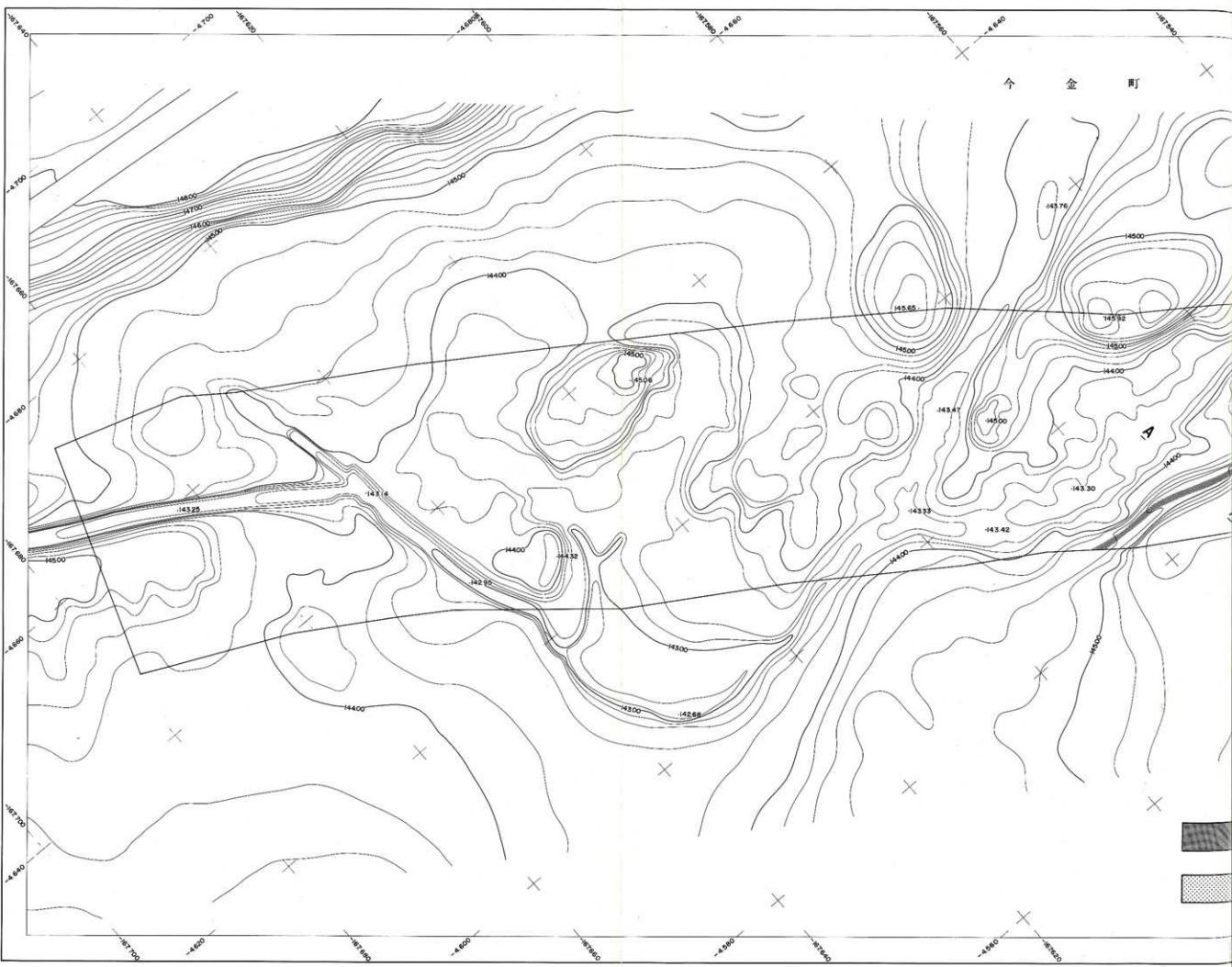


図 3 造跡断面図



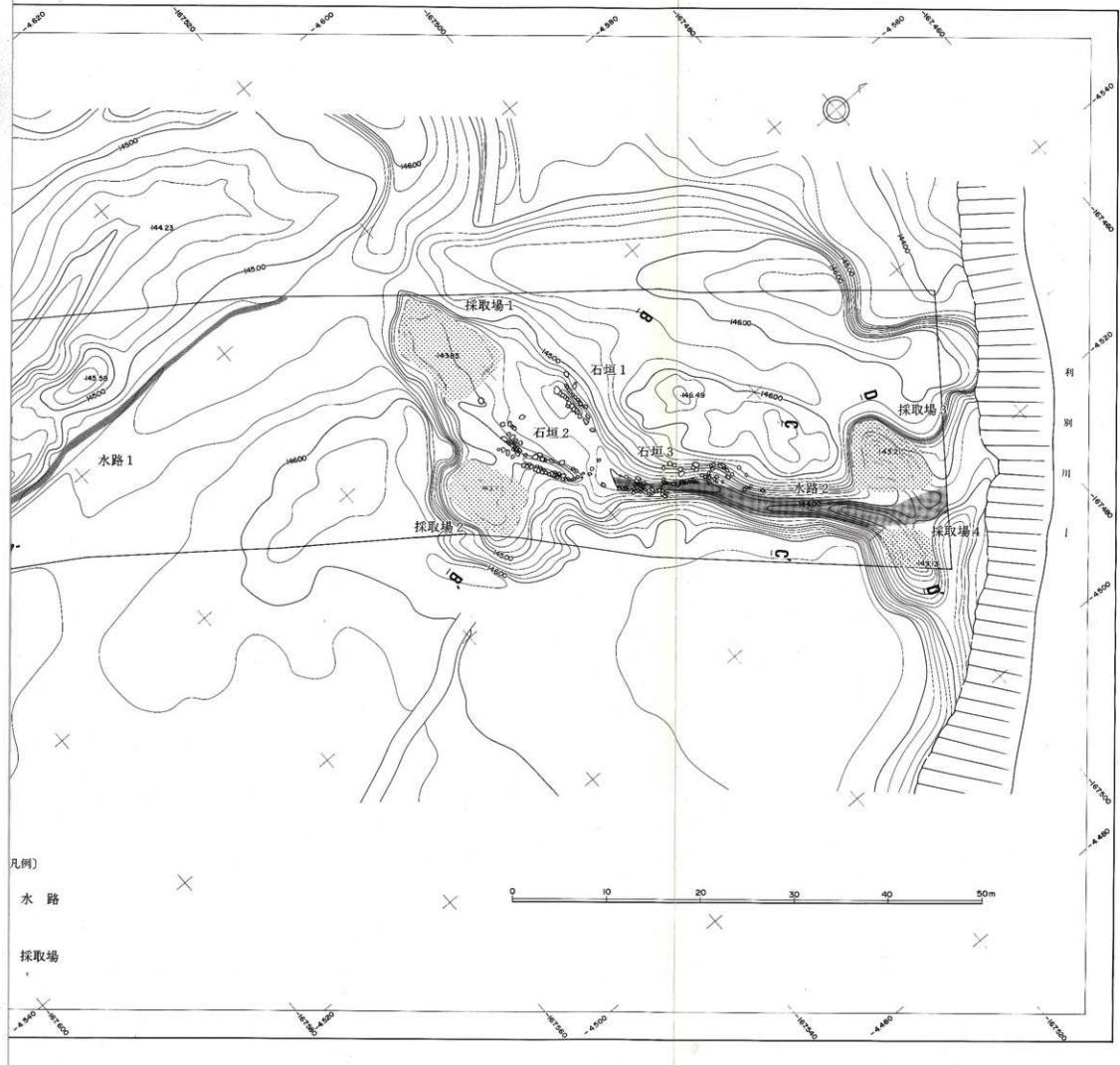


図4 遺跡全体図

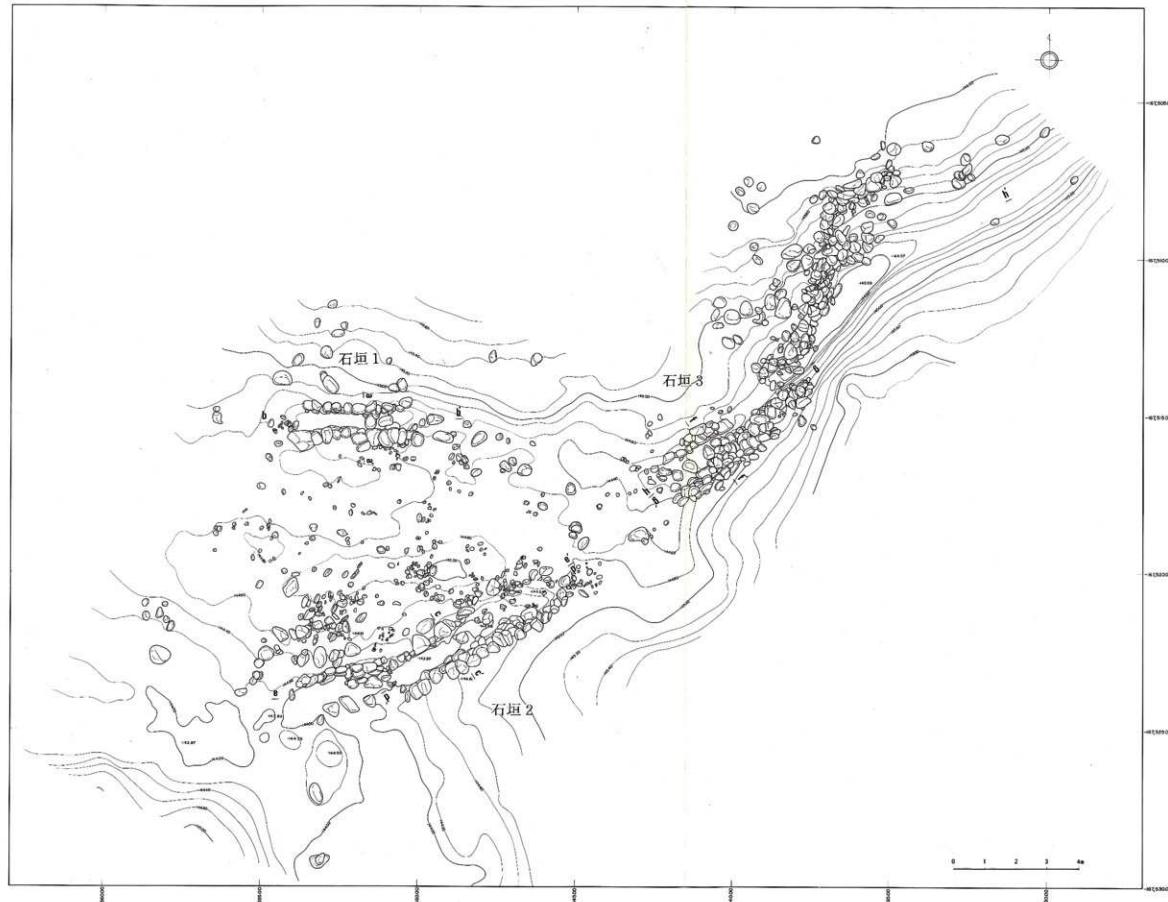
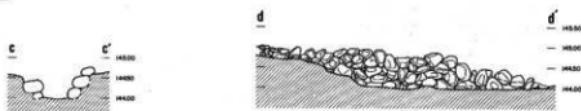


図 5 石垣平面図

石垣 1



石垣 2



石垣 3



図 6 石垣断面および立面図



III ま　と　め

以上のように、今回の調査により、水路2、石垣3、採取場4か所を確認した。

まず、これらの遺構が何故砂金の採掘に関わるものと判断されるのか。美利河地区では、マンガンの採掘が行われてきたのはすでに述べたが、採掘は明治25年からニセイベツ川下流付近において始められた。最初は露天掘りであったが、後坑道掘りが主流となった。このほかにチュウシベツ川下流左岸、旧国鉄瀬棚線美利河トンネル付近、美利河ダムよりやや下流の利別川左岸において採掘が行われたが、昭和30年代の後半にはほとんどが休山を余儀無くされている。これらのマンガン採掘が層状鉱床を採掘するのに対して、河床から砂マンガンを採取する方法がニセイベツ川で昭和24年から本格的に始められている。いずれにしても、美利河三股より上流の利別川流域では、マンガン採掘は行われていない。因って、今回の調査区に残る遺構は砂金の採掘としか考えられない。

では、どのような採掘方法によるのであろうか。II章で述べた遺構は一連の作業の結果残されたものであり、各遺構の関連を考えることにより、作業内容を明らかにできると考える。地表面からの観察のみでは限界があるであろうが推察してみたい。鉱物の比重選鉱には水が不可欠であるが、調査区域内では選鉱するための水は得られないで、遠くから集水したのであろう。水路1を流れているであろう水と4か所の採取場を洗滌したであろう水の源は同一であったと思われる。4か所の採取場の採取の前後関係は明らかでないが、集水し貯水したであろう所に近い所から採掘したと思われる。つまり、調査区南西部採取場1・2から北東部3・4に向かって採掘が進んだものと考えたい。石垣内で選鉱が行われたとは考えられないから、石垣の機能は、美利河1・2砂金採掘跡の調査で考えられたとおり、水量の調査を行ったものと思われる。水路2は前述のとおり、人為的な掘削によるものではなく、水の営力によるものと考えられる。

さて、これらの遺構がいつ頃残されたのかは、今回の調査では明らかにすることはできなかった。昭和56・63年に調査された美利河1・2砂金採掘跡の報文では、調査箇所が安政年間に描かれた「クンナ井砂金山絵図」に示された線行場所に該当しない点、また、大規模かつ組織的な採掘であることから江戸時代初期の松前藩による可能性が高いとした。

「クンナ井砂金山絵図」に描かれた採取方法は、図でみる限り河原で川の流れを切替える「流し掘り」の手法を表していると考えられる。だとすれば幕末以降の砂金採掘は河原で行われ、段丘上での砂金採掘は松前藩によるものと考えることができる。この点については、他の松前藩による砂金採掘跡地に残された遺構との比較を行う必要がある。

また、時代を決定する大きな決め手として、テフラがある。このことについては、すでに秋葉力氏によって指摘されているが、美利河1・2や今回の調査した砂金採掘跡が17世紀前半であるならば、駒ヶ岳の大噴火（寛永17年、1640年）による火山灰がなんらかの形で関与しているはずである。美利河地区においても駒ヶ岳が起源と思われる火山灰が連続的にではないが見られる。今回の調査では発掘によって当時の作業した面を露呈するには至らなかったが、調査方法における今後の課題である。

主な引用参考文献

- 松井 愈はか 1955 「北海道後志國今金町東北部地域地質鉱床調査報告書」今金町
秋葉 力 1981 「17世紀後半の砂金地」『鋼玉』21号（秋葉力 1991 「トネベツの丘」所収）
矢野牧夫 1988 「貴金郷への旅」道新選書7 北海道新聞社
眞北海道埋蔵文化財センター 1989 「今金町美利河1・2砂金採掘跡」北理調報第59集



水路 1 (南から)



水路 2 (南西から)

図版 4 造構(2)



造構近景（南西から）



石垣1（東から）



石垣2（北東から）



石垣 1 (南から)



石垣 2 (北から)

図版 6 造構(4)



石垣 3 (南東から)



採取場 3 (南東から)

今金町文化財調査報告3

平成3年2月28日 発行

美利河3砂金採掘跡

発 行 北海道瀬棚郡今金町字今金435

今金町教育委員会

(TEL01378-2-2026)

印 刷 ㈱ 総 北 海 札幌支社

札幌市北区北30条西5丁目菊地ビル4F

